優秀賞

大好きなんだよ。

鹿児島県　野口茉衣子

　またお父さんが電話越しのおばあちゃんに向かって怒っている。おばあちゃんから電話がくると、いつもお父さんが怒って受話器をおいて終わる。おばあちゃんは私が 6 才の時におじいちゃんを亡くしてからずっと一人暮らしで、遠く離れているから、なかなか会うことができない。一言でいうと、おばあちゃんは寂しがり屋だ。電話はいつも弱気なことばっかり言っている。私は「うん。うん。」と聞くことしかできない。そんなおばあちゃんの電話にお父さんが出た日には、家中が凍りつく。久々に会いに行ったって、お父さんはおばあちゃんの弱音を聞いてまた怒る。お父さんはおばあちゃんのことが嫌いなんだと小さい頃からずっと思っていた。

　私が中学 2 年が終わる時、お父さんの仕事の都合で転校するかもしれないと聞かされた。場所はおばあちゃんの家の近く。私ははっきり言って、転校なんかしたくなかった。ある夜家族会議が開かれた。お父さんだけが単身赴任するとか、そのまま今の家に残るとか、色々な意見が出てきた。お父さんがきり出した。「お父さんは、おばあちゃんの傍にいてやりたい。あんなおばあちゃんだけど、お父さんを産んでくれた母親だから。みんなで近くへ住んで安心させてやりたい。」そう言いながらお父さんが泣いた。子どものように泣いた。お父さんのそんな姿を初めて見た。いつもおばあちゃんに対して怒ってばかりいるお父さん。でも、本当はおばあちゃんのことが大好きなんだ。寂しがり屋なおばあちゃんのことが心配で心配でたまらなかったんだ。私も家族もわんわん泣くお父さんを見て泣いた。

　あれから 4 年、おばあちゃんは前より弱音をはかなくなった。でもたまに弱音をはいてやっぱりお父さんに怒られる。でもね、おばあちゃん、「お父さんはおばあちゃんのこと大好きなんだよ。って、いつか言っちゃおうかな。」なんて考えている。

Copyright(C) THE JAPAN WOOL TEXTILE CO., Ltd. All Right Reserved.